

【 復活のトロパリ 第1調 】



きゅ うせ いしゅよ、イ ウ デ ヤ の ひ と は か を
 救 世 主 人 墓
 ふ うじ て、へ い そ つ なん ぢ の い さ ぎ よ き み を
 封 兵 卒 爾 潔 軀
 ま も る と き、なん ぢ は み っ か め に ふ く か つ
 守 時 爾 三 日 目 復 活
 し て、せ か い に い の ち を た ま え り。
 世 界 生 命 賜
 ゆ え に て ん ぐ ん は なん ぢ い の ち を ほ ど こ す の
 故 天 軍 爾 生 命 施
 しゅ に よ べ り、ハ リ ス ト ス よ、こ う え い は
 主 呼 光 榮
 なん ぢ の ふ く か つ に き し、こ う え い は なん ぢ
 爾 復 活 歸 光 榮 爾
 の く に に き す、ひ と り ひ と を い つ く し む
 國 歸 獨 人 慈
 しゅ よ、こ う え い は なん ぢ の お も ん ぱ か り に
 主 光 榮 爾 慮
 き す。
 歸

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】



し と と ひ と し く ど う ざ な る も の、ちゅ う
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神智 役 者 聖
なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい
神 撰 笛 愛
にみちたるうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光
しょうしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照 者 亜使徒主教 聖
よ、なんちのぼくぐんのため、および
爾 羊 群 爲 及
ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
全 世 界 爲 生 命 賜 聖
さんしゃにいのりたまえ。
三 者 祈 給 へ。

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき
光 榮 父 子 と 聖 神 歸
す、
せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成 聖 者 亜使徒 聖
くになんちをたびびとおよびいほうじんとうけ
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストの
外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて敵
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのこととなし、かれらにか神
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストのきょうかいをたて
恩 寵 與 教 會 建

たり、いまこのきょうかいのためにより
今 此 教 會 爲 祈

たまえ、けだしわれらそのしよしはなん
給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼 我 善 牧 者 慶

べよ。

【 復活のコンダク 第1調 】

いまもいつもよよに、アミン。
今 何 時 世 世

しゅさいよ、なんぢはかみなるによりてこう
主 宰 爾 神 因 光

えいのうちに はかより ふくかつし、せせ
栄中 墓 復 活 世 世
かいを もと もに ふくかつせしめ たま えり。
界 偕 復 活 給
ひとの せ い は なんぢ を か み と し て ほ め う
人 性 爾 神 讃 歌
た い 、 し は ほ ろ ぼ さ れ 、 ア ダ ム は た の し
死 滅 樂
み 、 イ ヴ ァ は い ま な わ め よ り と か れ
今 縛 釋
て よ ろ こ び て よ ぶ 、 ハ イ ス ト ス よ 、 なんぢ
観 呼 爾
は し ゅ う じ ん に ふ く か つ を た も う し ゅ な り 。
衆 人 復 活 賜 主

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有

となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾

り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に

痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が

聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる

もの者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の

仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈

と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖

なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) ^{けだしわ かみ なんぢ せい われら こうえい なんぢち こ せいしん けん いま いつ よよ}
蓋 我が神よ、爾 は聖なり、我等光榮を爾 父と子と聖 神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い しん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐



司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第1調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐れみを我等に垂れ給え、



誦經) 義人よ、主の爲に喜べ、讚榮するは義者に適う、





誦經) ^{しゅ われらなんぢ たの ごと} 主よ、我等 爾 を頼むが如く、



【 アポストロス 使徒經 188 端 コリント後書 9 章 6～11 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ こうしょ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい とぼ ま もの とぼ か ゆたか ま もの ゆたか か ひとのおのそのところ} 兄弟よ、乏しく稼く者は乏しく穡り、豊に稼く者は豊に穡らん。人各其心の
^{ほつ ところ したが うれい よ あら し な あら ほどこ けだしかみ たのし} 欲する所に随い、憂に由るに非ず、強いて爲すに非ずして施すべし、蓋神は樂
^{あた もの あい かつかみ なんぢら しょおん と よく なんぢらつね およそ} みて與うる者を愛す。且神は爾等を諸恩に富ましめんことを能す、爾等常に凡の
^{こと おい た およそ ぜんじ な ゆたか ため しる ごと いわ} 事に於て足らざるなくして、凡の善事を爲すに饒ならん爲なり、録されしが如し、云
^{かれ さん ひんじゃ ほどこ そのぎ よよ そんな ま もの たね あた しょく ため} く、彼は散じて、貧者に施せり、其義は世に存すと。播く者に種を與え、食の爲
^{パン そな もの ねが なんぢら ま たね そな かつふや またなんぢら ぎ み ま} に餅を備うる者は、願わくは爾等が播く種を備え且殖し、又爾等の義の實を益さんこ
^{なんぢら およそ こと と よ ひろ ほどこ え ため こ われら よ かみ} とを、爾等が凡の事に富むに由りて、博く施すを得ん爲なり、此れ我等に由りて神に
^{たてまつ かんしゃ な} 奉る感謝を作す。

(比較用 口語訳) 少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。「彼は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりでである。種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。

【 アリルイヤ 主日第1調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾 に 平 安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾 の 神 にも、

司祭) ^{えいち} 睿 智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう} 願 わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃 頌 せられん、



誦經) ^{おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ} 大 なる 救 を王に 施 し、 憐 を 爾 の 膏 つけられし者ダヴィド及び其 裔 に 世 世 に

^{た もの われなんぢ な うた} 垂るる者よ、我 爾 の名に歌わん、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人 を 愛 する 主 宰 よ、我が 心 に 神 を 知 る 智 慧 の 浄 き 光 を 輝 か し、我が 思 念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の 目 を 啓 きて、 爾 が 福 音 の 教 を 悟 ら しめ 給 え、我が 衷 に 爾 の 福 たる 誠 を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏 るる 畏 を も 入 れ て、我 等 が 悉 く の 肉 體 の 慾 を 踏 み、凡 そ 爾 の 喜 ぶ 所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
 を思い且つ 行 いて、屬 神の生活 を過ぐるを致させ給え、 蓋 ハリストス神よ、
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
 爾 は我が 靈 と 體 との 光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を 施 す 爾 の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 26 端 6 章 31～36 節 】

司祭) 睿智、 肅 みて立て聖 福音經を聴くべし、 衆 人に平安、



司祭) ルカ傳の聖 福音經の讀、



司祭) 謹 みて聴くべし、 主曰えり、 人の 爾 等に行 わんを欲する事は、 爾 等も是くの如く

これ ひと おこな なんぢらも なんぢら あい もの あい なんぢら なん かんしゃ
 之を人に行 え。 爾 等若し 爾 等を愛する者を愛せば、 爾 等に何の感謝かあらん、
 けだしざいにんら かれら あい もの あい も なんぢら ぜん おこな もの ぜん おこな なんぢ
 蓋 罪人等も彼等を愛する者を愛す。 若し 爾 等に善を行 う者に善を行 わば、 爾
 ら なん かんしゃ けだしざいにんら か ごと こと おこな も かえ のぞみ もの
 等に何の感謝かあらん、 蓋 罪人等も是くの如き事を行 う。 若し返さる 望 ある者
 か なんぢら なん かんしゃ けだしざいにんら すう ごと かえ ため ざいにんら か
 に借さば、 爾 等に何の感謝かあらん、 蓋 罪人等も數の如く返されん爲に罪人等に借
 すなり。 然れども 爾 等敵を愛し、 何をも望まずして善を行 い、 又借し與えよ、 則
 しか なんぢらてき あい なに のぞ ぜん おこな またか あた すなわち
 爾 等の 賞 は多からん、 爾 等至上 者の子と爲らん、 蓋 彼は恩に負く者及び惡しき
 もの じあい ほどこ ゆえ なんぢら じれん なんぢら ちち じれん ごと
 者に慈愛を 施 す。 故に 爾 等慈憐なること、 爾 等の父の慈憐なるが如くなれ。

(比較用 口語訳) 人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ。自分を愛してくれる者を愛したからとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、自分を愛してくれる者を愛している。自分によくしてくれる者によくしたとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、それくらいの事はしている。また返してもらおうつもりで貸したとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でも、同じだけのものを返してもらおうとして、仲間に貸すのである。しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがた

はいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。
あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。



しゅよ、こ う え い は なん ぢ に き し、こ う え い
主 光 榮 爾 歸 光 榮

は なん ぢ に き す。
爾 歸

※ 聖体礼儀③（金ロイオアン）へ